組合長に聞くCO情勢

闘いのヤマは三月末

政府、一切の懸案打ち切るハラ

CO闘争の七級問題がいよいよ大詰をむかえるにあたって、CO問題の当面の情勢を宮川組合長に語っていただきました。

七級中心に問題が集約

――当面する問題には、どのようなものがありますか？

組合長　原則的には、従来から引きつづいていた問題は、前收補償、完全治療、解雇制限、職場造成と二時経過観察になっていた五十八名の人たちの今後のとり扱いです。――中央の情勢は、政府は三月末から四月のはじめにかけて、これらの問題の一切に決着をつけたいと思っているようです。

このほかCO法では二年間じか保障されていないアフター・ケアが十月末できれています。これは昨年の十一月九日の七周忌を前にした交渉で七級問題に決着がつくまで延長されたのでこれも今後どうつづけさせるか、を闘わなければなりません。

要するに七級認定問題を闘うことは、いままで懸案になっていたCO問題一切を打切ろうとする政府や会社の意図と闘うということです。

異議申請の結論も

――三月末がヤマ場となるということはなぜですか？

組合長　昭和四十一年十一月の打切りに対する異議申請（五十名）をしていましたが、中央審査会では今期末に結論を出すそうでしょうか？

組合長　昨年末選挙での自民党の三百議席獲得と社会党の後退で、とくに中央官庁の官僚は非常に高姿勢になっているようです。

社会党は国会内での活動がせばめられ、力も以前ほどにはありませんし、労働省はこの五十名を含めて七級の認定をしたい意向のようです。だから三月末から四月のはじめがヤマ場になるのです。

きびしい闘いの決意が必要

――闘いにあたっての情勢はどうでしょうか？

組合長　昨年末選挙での自民党の三百議席獲得と社会党の後退で、とくに中央官庁の官僚は非常に高姿勢になっているようです。

社会党は国会内での活動がせばめられ、力も以前ほどにはありませんかで通産省に押しかけていっても官僚たちが平然と「やっていけない所はツブスことになっているでしょうが」と開き直る状態です。

だから私たちのCO闘争も、いままで以上のきびしい闘いの決意が必要です。

昨年の十一月九日の大集会で決意したように、すべての仲間たちと手をとりあって闘うことが必要でしょう。

内部での討議をいま一度

――その闘いのために、まずわれわれはなにをすべきでしょうか？

組合長　まず、三池の内部でCO問題の重要な段階にきたという意識と、その中身を自分のこととしてとらえがえすことがまず必要です。そして、CO闘争は三池の労働運動にとって将来とも重要な闘いであるという意志統一をしましょう。

つぎに外部にどう働きかけるかということですが、あくまでも炭鉱労働者とCO患者の実態、石炭合理化の実態をあらためてバクロしなければなりません。

私たちは今回の福利闘争もそのような視点でとらえなければなりません。いよいよ春闘もはじまります。この闘いのたかまりの中に大たんに入っていきましょう。

具体的な要求と闘いの進め方を早急に出すよう準備しています。

合理化強行後の港務所

職場はまさに〝地獄〟

それでもがまんせよというのか！

会社の手によって首切りが強行された三池港務所には、あきれて口がきけない重労働が新労組員の上に押しつけられている。

――作業員をはね出したあとの人手不足をつくろうために、三番方はなくしてしまって、これまで一―二―三番でやってきた仕事をほとんど一―二番に押しこんで、有無をいわさずやらせている。

飯食いどきもない時差出勤

――作業がとくにいそがしい時刻に労働力を集中するために、時差出勤がはじまった。

たとえば浜駅に見られるように、午前十二時―午後七時という勤務時間が押しつけられた。

その間は、飯の食いどきもないいそがしさ。それでもはじめ、昼と夜用の二段ベントウをもってくる新労組員がいたが、「金はかわらんとに、金のかかるベントウば二段もっていってもらっては、家計がやっていけん。おまけに、島の仕事もしてもらえんごつなってしまった」と、主婦から苦情が出たため、いまは昼は仕事のあい間をくぐって即席ラーメンでがまんしているという。

そうなると、こんどは夕飯は家に帰ってから午後八時ごろとなり、おかげでその人はスッカリ胃の調子をこわしてしまって、「体がどげんなるじゃろ、先々が思われる」とまいっているという。

――電車の架線工に電線を配線させたり、旋盤工に有無をいわさず熔接をやらせたり、とにかく一人一人の労働者に寸分の暇さえ与えないやり方が露骨になった。

連勤、連勤のまた連勤

――いっぺんに二十一人（三池労組員の六人を含め）をはね出された三池港駅では、これまで置かれていた九人の予備員がゼロとなった。そのため、一人でも欠勤するとすぐ連勤がくる。それに、いま感冒の大流行だからたまったもんではない。

こんなひどい例がある。ある操車手の新労組員の場合、二日間に五方という連勤を押しつけられた。はじめの八時間につづいて八時間、もひとつつづいて八時間と働きづめ、次の八時間を職場から解放されたと思ったら、次にはすぐ八時間―八時間とまた連勤した。まさに四―八時間のうち休んだ時間はたった八時間。それも会社―自宅の往き帰りを思えば、ほんとに休めたのは果して何時間だったろう。こんなふうだから、いままではたとえ連勤から開放されても、家に帰るよりそのまま職場のバンコの上にひっくり返って寝る人がめずらしくないという。

月に何回女房を抱けるか？

それでも職制は「ひきつづいて連勤してくれんな」といってくる。ことわろうものならすぐ、「ではあんたにはもう、連勤はやれん」どくるので、そうなっては……というわけで、こんな残酷な連勤を新労組員の人々は「毎日毎日がうらめしかばん」とくやみつつも、やっぱりひきうけなければならない状態の中へ追いこまれている。

こんな苦しみの中につき落とされた新労組員からは、あの家庭の団らんなどはとうの昔になくなった。それどころか「かわいい女房を、果して月に何回抱けるか。もう人間の生活じゃなか」――とは、三池労組員たちの感想であるが。

それでも職制はいまでも「会社がよくなれば、皆さんもよくなる」といいつづけ、新労組の幹部らもまた「会社が赤字でぶっつぶれようとしているとき、これくらいの合理化はしんぼうすべきだ」などといって、会社とぐるになっているという。

「去るも地獄、残るも地獄」という言葉があるが、まさに合理化強行後の港務所の各職場に見る実態こそ、何にもまして地獄だということができる。

どろんこで落炭掃除

危っかしい新設の線路

「危いとこじゃった」

坑道に落ちていたマイト

去月二十九日のこと三川鉱の三百五十メートル坑道で電管が結着され、発破をかけるときのままのダイナマイトが発見された。

ダイナマイトは二本（三川指導部所属の保線工）が保線作業中に発見。他の一本はその日、一新労組員のMさんが午前十時ごろ発見したという。

二十八日の三番方で出勤した宮浦の一係員の手で管理されているはずのダイナマイトだったというから、その朝昇坑中の人車の中で整備中に落としたものらしい。

発破作業で残ったダイナマイトは、当の現場で整理しちゃんと確認した上袋におさめ、坑底の火薬庫に返納しておかねばならないはずなのに、人車の中で整理してしかも取り落とすというのだから恐ろしい。聞くと、そのダイナマイトが何かの拍子で爆発でもすれば「最低人車事故はすまんかった。うっかりすれば人命もなくなっとったところじゃった」と、職場の人たちは首すじを縮めて語った。

さいわいにことなくすんだが、こんな恐るべきあやまちを二度くり返されてはたまらぬ。三池労組は、直ちにダイナマイトが発見されたその日のうちに、会社に対して厳重に抗議した。

今後はここで闘う

13人の胸には誇り

こんどの港務所合理化で、十三人の三池労組員がこれまでの職場からはね出され、これまで下請の組夫がやってきた思いも寄らぬ落炭掃除などという仕事を押しつけられ、馴れぬショベルをふり、てんびん棒をかついで働いている。

現場をたずねると、それでも十三人の人々は闘う労働者の誇りを胸に「これからはここで闘うばかり」と、返って闘魂を燃やしていた。

新労組の幹部らは、木材会社ゆきを押しつけられた新労組員たちに向かって「それ見らんの。あんたたちはよかったろうが」と、新労組員たちの怒りをそらすのに懸命のようだ、あっハッハ、と三池労組員たちは明るく語った。

勇気を与えた編集者会議

かねて計画中だった職場編集者会議は、去月三十一日―二月一日に玉名で開催された。

会議には四十人近くの職場新聞活動者、格別実務者が集まっただけに、実務者としての悩みも出されて、真剣に討論した。

ひき出そう創造力

最終的には、職場新聞で大切なことは、①一人ひとりの仲間がもっている創造力を引き出し、育ててゆき、闘いの武器としてゆくこと、②仲間のあるがままを尊重すること、③ベタとか上手とかを問題にするより、書いてもらうことが先決であること、④匿名は卑きうではなく、そうしなければならぬ環境改善のため闘うこと、⑤出された意見や要求、批判は必ずとり上げ、またこたえること、⑥反対意見や少数意見はまっ殺せず、尊重すること、そこに統一のカギがあること、⑦結論は与えるものでなく、自分自分でつかんでもらうべきものだということ、⑧あらゆるセクトこそ何よりの敵であること、⑨編集会議はなるべく意見や思想の違った者が、なるべく多く集まって行なうこと――などを確認し、がんばることになった。

それにしても「うちでは編集会議やるためには、いったん坑口で乗ったバスから、もういっぺん降りんなんけん、勇気がいる。これから先、この勇気が必要ではないか」といった、四山指導部七分会の〝坑外〟編集者の言葉は大切ではなかろうか。